

◆【海員随想】B I S K R A号航海記 (23) ② 新木繁雄

8月15日 アルジェ停泊中

9時30分陸発のボートで帰るつもりで岸壁へ行ったら、船長が11時に帰るので、それまでボートは出さないという。C N A Nの事務所で話していたら、望月さんが沖に泊まっている船へ、ラダーアングルインジケーターの修理に行くというので、便乗させてもらおうと思っていたが、その船からの迎えのボートがなかなか来ず、結局本船のボートのほうが早くなった。午後にもパイロットが乗るような気配だったが、キャンセルになった。

船尾で釣りをしていたら10センチほどの真っ赤なオコゼが釣れた。これは危険な魚なんだぞ、とアルジェリアクルーたちに説明したまでは良かったが、飛び跳ねて私の足にちょっと触っただけに、ひれの先の針に刺され、猛烈な痛みが走った。

機関長が30センチほどの鯛を釣った。これを使って機関長の奥さんに作り方を教えながら茶わん蒸しを作った。ギンナンを5粒ずつ入れたら「このおいしい実は何だ」と聞く。ユーゴスラビアにはギンナンはないのかな。私の茶わん蒸しには、刺されたオコゼを入れた。茶わん蒸しはダニエラ（娘）もアントニア（奥さん）も喜んで食べてくれた。

8月16日 アルジェ停泊中

10時頃、ジェナウィー氏と小枝さん来船。これまでに出了たデッキ関係のギャランティレポートについて打ち合わせ。機関部関係は接岸後に行う。

昼頃、ジェナウィー氏が本船のライフボートで帰るといので、武村と私も便乗して上陸した。

市場で生ウニを見ていたら、1つ割って見せてくれた。中身がいっぱい詰まっていた見るからにおいしそうだったので6個買った。

5時陸発のビスクラ行きのサンパンに、ネドロマ号（舞鶴で建造したC N A Nの船）の乗組員の1人が間違っ乗ってしまった。すぐに気がつけば良かったのに10分以上走ってからその男が騒ぎ出した。大港外に停泊しているネドロマ号へ彼を送って行ったので、倍以上の時間がかかった。ネドロマ号からの帰り、陸からの吹き出しが強くなり、波が高く大揺れに揺れながら帰ってきた。

8月17日 アルジェ接岸

抜き打ちに、ミッドナイトにパイロット乗船接岸。金曜日はイスラム教の休日で、荷役なし。

特にすることもなく、機関室の見回りだけ。アルジェ近くの乗組員は入港と同時に家へ帰り、船にいるのは全乗組員の3分の1くらいだ。何をするにしても手が足りない。こんな人数でよく接岸できたと思う。船の仕事より家へ行く方を優先する国柄だ。

機関長が「一家で上陸する」と言っていたので、武村と私は日本ソバを作ろうと、湯を沸かしていたら「上陸は取り止めた。焼きそばを作れるか」と言い出した。その後、焼きそばは作ったのだけど、機関長のところへ来ているお客さんがなかなか帰らないので、奥さんに機関長一家の分を渡し、われわれだけ先に食べて上陸した。

造船所駐在員の宿舎へは、いつも車で行くので、1度歩いてみよう、と、あちこち道を尋ねながらホテル・オラシーの近くまで行った。ここで道を聞いた人が「遠いから送ってやる」と言って、ラポラス・ケネディ教会（アメリカ大統領ジョンケネディが来た時、礼拝してこの名前がついた教会）まで彼の車で送ってくれた。お礼に、持ってきたインスタントラーメンを3個あげて作り方を説明してやったら「サハ」（アルジェリア語でありがとう）を何度も繰り返して帰っていった。宿舎では、昨日私たちが来るといので、ごちそうを作って待っていたらしい。昨日は風が強くてボートが出せなかったのだから致し方なし。大変なごちそうというのを食べ損なった。

「海員だより」